

「国立国会図書館書誌データ 作成・提供計画2026-2030」 素案へのコメント

木村麻衣子（日本女子大学）

2025-10-16

令和7年度書誌調整連絡会議



2025年9月18日に米国議会図書館 収集・ 書誌アクセス局（ABA）を訪問しました



2

News

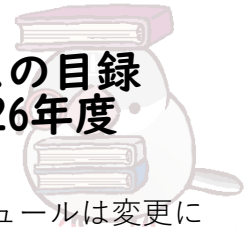
- LCでは2024年10月から2025年6月にかけて、図書館業務システムとしてFOLIOを段階的に導入。ただし、FOLIOではBIBFRAMEを扱えない
- 2025年春より、BIBFRAMEを正式導入
- 現在は、BIBFRAMEエディターであるMarvaで書誌データ作成
⇒BIBFRAME形式のデータがBFDB（RDFトリプルストア）に保持される⇒MarvaからLCAP Productivity Toolkitを起動するとBIBFRAMEデータがModern MARC形式に変換される⇒FOLIOが（変換された）Modern MARC形式の書誌データ、および典拠データ／所蔵データを持つ という運用



News

- 過去分MARCデータもすべてBIBFRAME形式に変換してBFDBに保存されている
- Marva上で典拠データも作成できるが、BIBFRAME形式にはならずMARC形式でFOLIO上の典拠ファイルと同期する（典拠はMARC形式で流通するため）
- ABAでは、アジア言語資料を含めすべての資料のメタデータをMarvaを使って作成している
- 非ラテン言語については、ScriptShifterという翻字ツールを開発しMarvaに実装済
- ABA以外の部門（特殊コレクション担当など）はMARC21ベースの目録作業を実施中。BIBFRAMEのトレーニングは終了しており、2026年度末までには移行したいと思っている（が決定ではない）

※2025年9月時点の情報であり、予定のスケジュールは変更になる可能性があります



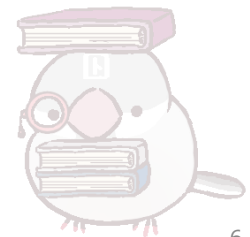
NDLの優れている点①

- NDLでは、国立国会図書館サーチから個別の書誌レコードをダウンロードできるほか、API経由で特定の検索条件に合致する書誌レコードをまとめて取得できる。週次更新のJAPAN/MARCデータセットも入手できるし、申請により書誌データや典拠データの全件提供も受けられる
- LCでは、ABA局長より「BIBFRAMEデータを将来的に誰でも自由に無料で取得・共有できるようにしたい」という旨のお話を伺ったが、現在のところMARC形式の書誌レコードを個人が無料で随意に入手できる環境ではない



NDLの優れている点②

- NDLは典拠データの質の向上，対象の拡充に努めている（素案2.1.2）
- LCは迅速な目録提供等のため，現在は簡易レベルの典拠データを作成するに留めているとの説明があった
 - ただし，LCの典拠データは，PCC NACO参加館によっても追加・拡充されるため，日本とは状況が異なる



NDLの優れている点③

- 国立国会図書館サーチで表示される書誌データ中の典拠形アクセス・ポイントに対しWeb NDL Authoritiesへのリンクが表示され、Web NDL Authorities内の典拠データの典拠形アクセス・ポイントを使用して国立国会図書館サーチで書誌データを検索することが可能。典拠コントロールの成果が利用者に見える（素案2.2.1「シームレスな連携」）
- LCの新しいOPAC(2025年6月30日リニューアル)にはそのような機能は見当たらない



素案(1.1)へのコメント

- 思い出される『全日本出版物総目録』(1951-1977)
- NDLが所蔵しない国内刊行資料も収録対象としようとしたがうまくいかず、1961年から国立国会図書館所蔵資料のみを対象とした
- 例えば電子コミックは、どのプラットフォームに、どのバージョンが(タテヨミor単話or単行)存在するかなど把握出来たら素晴らしい(が大変そう)



画像出典: 国立国会図書館.全日本出版物総目録 昭和23年度. 1951, <https://dl.ndl.go.jp/pid/2968761/1/3>. 8

素案(2.1.2 ; 2.2.1)へのコメント

- 典拠データの拡充は喜ばしい
- 他機関が作成した信頼における典拠データを共同提供プラットフォームに載せることで、永続的識別子を振り出してもらえればありがたい（そして統合できる典拠データ同士は統合してもらえればもっとありがたい）
 - 例えばどこかに信頼における漢籍著作の典拠データがあれば、それをプラットフォームに載せることで各機関が利用しやすくなるイメージ？
- NACSIS-CATの典拠データもぜひ統合してほしい



素案(2.2.2)へのコメント

- 関連の拡充（素案2.1.3）や識別子の入力拡大（素案2.1.1）は、要するにLinked Data形式（LC方式に乗るなら、BIBFRAME）でのメタデータ提供への布石
- BIBFRAMEはあくまでLinked Dataとしてメタデータを頒布・流通するための形式。OCLC ConnexionがMARC形式を捨てない限り、MARCの作成も頒布も当面は国際レベルで継続すると予想
- LCがMARC to BIBFRAMEとBIBFRAME to MARCの変換プログラムを提供し続ける限り、MARC形式での頒布も受入れも継続可能
- BIBFRAME対応に際して、日本語特有の、原綴+ヨミ+ローマナイゼーションはLCの変換プログラムでは対応しきれないと思われるので、独自開発が必要か



素案(2.2.2)へのコメント 続

- ・ 図書館間で書誌データをやりとりする分にはLinked Dataでなくてもよい（フォーマットが共通であればよい）が、図書館外とのやりとりをするためにLinked Dataにするのがよいのだと言われてきた
 - ・ それがBIBFRAMEでなければならない理由はないが、BIBFRAMEでもよい
 - ・ 図書館外の人にとってBIBFRAME形式が扱いやすいのかどうかは不明
- ・ 日本では、国立・大学・公共図書館がそれぞれ異なる書誌データフォーマットを用いている。これは不便なので、交換用フォーマットとして一律BIBFRAMEを採用することで相互運用を図ることができるなら、国内で作成される書誌データの効率的な利活用という意味で意義あるビジョンのように思われる



素案(2.2.2)へのコメント 続々

- そのためには国立国会図書館がイニシアチブを取ることが必要
- 大学図書館はエLEMENTの少ないCATPのコピーカタロギング／公共図書館は民間MARCの利用に業務が最適化されており，新RDAやBIBFRAME導入の検討に耐える目録人材がほぼ残っていない
- 国立国会図書館の強いリーダーシップに期待する



素案(3.2.1)へのコメント

- 素案は国内向けの広報を意図しているように見える
 - 国内向けの広報も大事だし、研究者には詳細な情報提供はありがたい
 - 類縁機関に対し、図書館がいかにきちんとやるべきことをやっているか広報し続けることも重要
 - しかし、現状のまま他館種に向けて広報しても効果は限定的（フォーマットが違うから）
- NDLが特に典拠コントロールの面でいかに優れた実践をしているか、国際的にもっとアピールすべきでは
例）統一書名典拠の無い状況からの起死回生モデルを世界へ

